

思いを豊かに表現し、書く楽しさを実感できる指導の工夫

国語科研究会議

研究員 菅野 明美（川崎市立南河原小学校） 野呂 公人（川崎市立中野島小学校）

佐々木 悟（川崎市立東高津中学校） 馬場 麻美（川崎市立稲田中学校）

指導主事 伊藤 悦子

I 主題設定の理由

平成 29 年 3 月に小学校、中学校の新学習指導要領が告示された。これからの学校に求められるものとして、その前文には「一人一人の児童（中学校では生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」が示されている。また、現行の学習指導要領と同様に新学習指導要領の「国語科の目標」においては「伝え合う力を高め」ることが明記されている。変化の多いこれからの時代に自己の確立を目指し、他者と協働しながら生きる子どもたちにとって「伝え合う力」が必要であることは言うまでもない。しかし、研究員に授業に係る悩みを聞いてみると、子どもたちの「書くこと」への苦手意識や抵抗感に係る悩みが多く聞かれた。そしてその話の中から「書くことが嫌いな子」「何を書いたらよいかわからない子」「パパッとぞんざいに書き、簡単に済ませてしまう子」などの姿が見えてきた。

書くことは、思考を整理し自己の考えを形成するうえでも、人とのかかわりにおいても重要なことである。子どもたちが思いを豊かに表現することや書くことのよさを実感する中で、生涯に渡って生活や生き方を支える「書くこと」に係る資質・能力を身に付けさせたいと考え、主題を設定した。

研究主題：思いを豊かに表現し、書く楽しさを実感できる指導の工夫

II 研究の内容

1 研究の方法

本研究会議の研究員の経験や現在担当している小学校 6 年生と中学校 1・3 年生の実態から、主題を実現するために「書くこと」の授業に取り入れる視点を 3 つ設定し、その視点に即して検証授業を行うことを計画した。検証授業 1 と 2 では①と③の視点を、検証授業 3 と 4 では①と②の視点を重視して取り入れ、小、中学校両方の検証授業における子どもの姿の表出状況から授業改善の効果を見取ることにした。また、「書くこと」に対する子どもたちの意識の実態や変容を把握するために、「書くこと」について、6 月と、11 月または 12 月に二度のアンケートを実施した。

授業に取り入れた視点

①書くことを通した人とのかかわり

②相手意識をもてる課題

③児童生徒自身が学びや変容を自覚できる手立て

2 研究の実際

(1) 検証授業1 「随筆を書こう 私の〇〇な言葉」(A小学校・6年)

①単元目標

- ・自分の成長や変容のきっかけとなった出来事や言葉を見つめ直し、事実と感じたこと、思ったことを区別しながら文章を書くことができる。
- ・互いの文章を読み、表現のよさやものの見方について考えたことを伝えることができる。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の成長や変容のきっかけとなった出来事と言葉について、出来事の描写と自分の気持ちや感想をわけて文章を書こうとしている。 ・友達と文章を読み合い、そのよさを伝えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の成長や変容のきっかけとなった出来事と言葉について、出来事などの描写と自分の気持ちや感想を区別し、自分にとっての価値や意味を考えながら文章を書いている。(ウ) ・友達と文章を読み合い、文章表現のよさやものの見方について考えたことを伝えている。(カ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・比喩や会話文、文末表現など表現の工夫に気付き、随筆の表現に用いている。(イ(カ))

評価規準の()は学習指導要領の指導事項

③言語活動 自分にとって大切な言葉について、随筆を書く。

④学習指導計画(9時間)

- 事前 随筆作品(文詩集「かわさき」を中心に)を読む。
- 第一次 第1時 「私の〇〇な言葉」をテーマに文章を書き、これからの学習について考える。
- 第二次 第2～7時 随筆を書く。書いた随筆について互いのよさを交流し、文章を推敲する。
- 第三次 第8、9時 作品を読み合い、よさや考えたことを交流する。単元を振り返る。

⑤学習活動の実際

第一次では、「私の〇〇な言葉」というテーマの基に題名を決め、自分にとって大切な言葉について文章を書いた。書いた際の困り感から、随筆作品を読み直し書き方や構成を学ぶ必要性を確認した。

第二次では、随筆の構成や表現の工夫について考え、随筆を書いた。既習の表現の工夫について、その工夫の効果を問うことで、意図をもって工夫を用いたり、友達の作品からその意図や効果を読み取ったりする姿が見られた。清書の前の交流では、友達の作品からよさを見つけ、友達の工夫を真似たり、自分の文章をじっくり読み直したりする姿が見られた。交流を通して、「作品をよりよくしたい」という思いを高め、「交流によって文章がよりよくなっていく」と感じている子どもが多かった。

第三次では、互いの作品を読み合い、よさを交流した。子どもたちは、思いが伝わってくるところや表現のよさに線を引きながら、友達の作品をじっくりと味わい、「次に書くときに、この表現を使ってみよう」と意欲を高めていた。また単元の終わりに、最初に書いた文章と最後に書いた文章を見返すことで、自分がどれだけ書けるようになったかを実感し、嬉しそうな表情を見せていた。第1時では全く書けず白紙のままだった子どももいたが、単元の中で描写の工夫をしながら書き上げられた。

文章を書く過程での交流という「人とのかかわり」が、友達や自分の表現のよさに気付くきっかけとなり、その気づきが表現の幅を広げ、書くことへの意欲を高めたと考えられる。また、最初と最後の文章を比べ、自分の学びや変容を理解することが、学習への満足感や次への意欲につながった。

(2) 検証授業 2 『友達深めるシート』を書き、友達の魅力をみんなに伝えよう (B小学校・6年)

① 単元目標

みんなが驚く友達の魅力についての事柄を収集して、「友達深めるシート」を書くことができる。

② 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
・みんなが驚く友達の魅力についての事柄を収集している。	・みんなが驚く友達の魅力についての事柄を収集することができる。(ア)	・文章を特徴付ける語句に気づき、語句と語句との関係を理解して書いている。(イ(ケ))

③ 言語活動

「友達深めるシート」を書き、交流する。

④ 学習指導計画 (5時間)

第1時 自分を見つめ直したり「性格類語辞典」を活用したりし、自分の性格を分析する。

第2時 友達の「自己分析シート」と「他の人からどう思われているのかシート」を見比べて、他の人に知らせたいその人の魅力について考え、インタビューする。

第3、4時 前時で引き出された魅力を基に、「友達深めるシート」を書く。

第5時 「友達深めるシート」を交流し合い、友達の新たな魅力を発見する。

⑤ 学習活動の実際

事前にクラス全員で互いのよいところ探しをした。「互いを知っているようで意外と書けないことがある、まだ十分に互いが見えていない」「みんなが書いたよいところは、意外と同じようなものが多い」ということを自覚させるために設定し、子どもたちは、この活動から「もっとクラスの子を見なければいけない」「自分の意外な面も伝えたい」という思いをもつことができた。

第1時では、自分を分析する活動に取り組んだ。自分の性格を思うままに書いた後、性格を表す言葉の一覧である、教師が作成した「性格類語辞典」を用いて自分の性格を分析した。ここでは、「自分でも意外に思う自分の一面があった」という子どもの反応が多く見られた。

第2時では、二人一組になり、事前に行った「他の人からどう思われているのかシート」と「自己分析シート」を見比べた。周囲が思う相手の性格と相手自身が分析した性格の違いをとらえ、「みんなに伝えたら驚く一面」に絞って取材活動を行った。最初のインタビュー活動ではその一面について詳しく聞き出すことができた。その後、一週間の取材期間を設け、伝えたい性格が表れた場面を見つけたり、相手の友達や家の人にインタビューしたりした。また、相手が過去に書いた文章を読んだり、自分の経験を思い出したりして、伝えたい一面につなげる児童もいた。

第3、4時では、取材内容を基に「友達深めるシート」を書いた。構成や書く際には、既習の「事実と意見、感想を分けて書くこと」「会話文を入れること」「自分の体験とつなげること」を意識させた。

第5時では、完成した文章の名前を消し、誰について書いたものかを予想する活動に取り組んだ。予想の根拠となる叙述に線を引き、理由を書いて交流した。交流後には紹介された人と文章の書き手に対し付箋を用いて感想を書いたが、これは書き手の取材活動に対する工夫を知ったり、紹介された人の新たな一面に気付いたりすることにつながった。

各活動において誰に何を紹介するのかといった相手意識を重視した結果、取材の必要性や取材内容を工夫する必要性に子どもたちが気付くことができた。また、単元後、席替え前に班員に書く手紙の内容に成長が見られた。相手の言動をよく見なければ書けない記述が増えたことから、取材する力や取材を表現に生かす力を、単元を通して身に付けることができたと考えられる。

(3) 検証授業3「学校紹介文を書こう」(C中学校・1年)

①単元目標

相手にわかりやすく伝えるために、相手を意識して材料を集め、構成や表現などを工夫して紹介文を書くことができる。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> 目的や相手を意識して書くための材料を集めながら、考えをまとめて表現しようとしている。 紹介文を互いに読み合い、題材のとらえ方、材料の用い方や根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりしようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的や相手を意識して書くための材料を集めながら、考えをまとめて表現している。(ア) 紹介文を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりしている。(オ) 	<ul style="list-style-type: none"> 事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心をもっている。(イ(ウ))

③言語活動 小学6年生に宛てた学校紹介文を書く。

④学習指導計画(5時間)

- 第1時 小学6年生が少しでも安心して中学校に来られるようにするために、中学校について伝えたいことを考え、それを伝えるための材料を考える。
- 第2時 自分が書く題材、材料(エピソード)を4人班で交流し、気づいたことを伝え合う。
- 第3時 紹介文の下書きをする。4人班で交流し、よく書けているところを伝え合う。
- 第4時 下書きを推敲し、清書する。
- 第5時 完成した紹介文の冊子を読む。学習を振り返る。

⑤学習活動の実際

第1時では、自分が6年生の時に中学校に対してどのような印象をもっていたかを振り返った。実際の6年生にとったアンケート結果から小学生が不安に思っていることを知り、6年生が安心して中学校に入学できるようにするために、何を伝えたいかを考え、材料を集めた。

第2時では、集めた材料から選んだものをエピソードとして文章にした。交流前に抽象的な文章の例を挙げ、どうしたら具体的な文章になるかを全体で考えた。交流の視点を確認したことで、「具体的な文章か、伝えたいことが伝えられる文章か」を意識して、気付いた点を記入することができた。

第3時では、班員からのアドバイスをもとに、エピソードを膨らませたり、考えをまとめたりしながら下書きをし、書き出しや終わり方を工夫することもできた。その後、書いた紹介文を班で読み合い、よく書けているところや表現の参考になったところを伝え合った。

第4時では、下書きした文章が目的や相手を意識した文章になっているか、自分の伝えたいことが表せているかを確認したうえで、推敲し、清書した。

第5時では、題材ごとに分類した紹介文を、材料の用い方や根拠の明確さなどに着目して読んだ。

生徒の振り返りには「交流で表現に変化が生まれた」「表現力が向上した」という実感が書かれており、明確な相手意識によって活動の焦点がしぼられ、学習の質が向上したことが捉えられた。小学生からの感想を喜ぶ姿に、人とのかかわりを通して「書くこと」のよさを感じていることもわかった。

(4) 検証授業 4 『私の INADA 道』を創作し、中学校での自分の生活を伝えよう (D 中学校・3 年)

① 単元目標

- ・中学校で過ごした思い出や身の回りの出来事、情景から心に感じたことを整理し、思いを表すのにふさわしい言葉や表現の効果を工夫し、俳句と地の文を書く。
- ・交流することで自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めることができる。

② 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> ・身近な出来事や情景をとらえ、心に感じたことを明確に表すための言葉や表現方法を考え、書いた文章を読み返し、文章全体を整えようとしている。 ・書いた文章を互いに読み合い、自分のものの見方や考え方を深めようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な出来事や情景をとらえ、心に感じたことを明確に表すための言葉や表現方法を考え、書いた文章を読み返し、文章全体を整えている。(ウ) ・書いた文章を互いに読み合い、自分のものの見方や考え方を深めている。(エ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年別漢字配当表に示されている漢字について、文章の中で使い慣れている。(ウ(ア))

③ 言語活動 中学校生活を振り返り、今の自分自身のありのままの姿や心境を俳句と地の文で書く。

④ 学習指導計画 (4 時間)

第 1 時 俳句と地の文の作品の文章構成や効果を考え、書きたい内容を決める。

第 2 時 俳句と地の文の下書きをし、最適な「見出し」を考える。

第 3 時 下書きを読み合い、より伝わりやすい文章に推敲する。

第 4 時 完成した作品を読み合い、学習を振り返る。

⑤ 学習活動の実際

「私の INADA 道」と題して自分の中学 3 年間で振り返り、最も伝えたいことを俳句と地の文という文章形態で書く活動を行った。

第 1 時では、まず俳句と地の文で作られた 2 作品を紹介し、構成や表現技法の効果、俳句の位置などについて話し合った。俳句の特徴や地の文の効果だけでなく、書き出しの工夫や言葉の選び方に注目するなど「言葉」を意識した取組となった。その後、イメージマップで、中心となる内容を絞り込んだ。考えの整理のためにワークシートを用い、始め・中・終わりで付箋を活用し、文章を構成した。

第 2 時では、今自分が一番伝えたいことから俳句と地の文の下書きをし、最適な「見出し」を考え、ほぼ全員が書きたい内容を見つけており、A4 サイズ 1 枚の下書きを作成することができた。

第 3 時では、下書きを読み合い、伝わりやすくするための推敲を行った。自分の下書きを読み直し、「この作品で一番伝えたいこと」「自分の工夫した点とその工夫の効果」を付箋にまとめ、推敲・交流の視点を提示した後、作品への意見を交わした。交流後に書き手がまとめた付箋の内容を発表し、その意図を踏まえてさらに伝わりやすくするための手立てを話し合った。

第 4 時では、前時と別のグループで「よいところ」と「作品から感じられるあなたのよさ」を交流した。付箋に気付きを記入し、気に入った表現に線を引いて花丸を付け、互いによさを認め合えた。

この学習では、人とかかわりを単元の中に意図的に取り入れたことで、相手意識が芽生え、よりよく伝えるための工夫を生徒自身が考えることができた。また、推敲のための交流においては生徒同士の教え合いにより表現を高めることができ、子どもたち自身に学べたという実感があつたと考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 検証授業より

(1) 「書くことを通した人とのかかわり」「学びや自己の変容の自覚」の視点を取り入れた授業から

検証授業1と4では、人とのかかわりを通して自他の表現の効果やよさに気付くことが表現の幅を広げ、次への意欲向上にもつながった。また、推敲段階の交流により児童生徒に学びや変容の実感が生まれ、満足感や達成感につながったと授業の様子や振り返りの記述から確認できた。その前提として、言葉に着目し「どのような表現がどのような効果を生み出すのか」という点を認知する必要があることも改めて見えた。学びの自覚には、明確な視点での「振り返り」が有効であった。

(2) 「相手意識をもてる課題」「書くことを通した人とのかかわり」の視点を取り入れた授業から

検証授業2では、相手や目的を子どもたちが理解して行うことで、取材する必要性が生まれたり取材内容の焦点化が行われたりした。「誰に対し何のために書くのか」という意識を徹底させたことにより、検証授業2では取材をする力やその際の視点を決める力などが育成され、検証授業3では、「どのエピソードを選択したらよいか」「どの表現の仕方が適切か」という思考を深めることができた。また、読み手の反応に喜ぶ様子からも「伝え合う」よさを感じている生徒の姿が見て取れた。

2 まとめ

検証授業やアンケートの結果から、設定した3つの視点は、思いを豊かに書くことを楽しみ、そのよさを感じるという点で一定の成果があったといえる。検証授業1において最初は白紙のままだった児童は、単元後、アンケートに「自分にとって書くことがどれだけ大事かわかった」と書き、週に一度の自習学習でその時々のお思いを書き連ねるようになった。検証授業2のクラスでは席替え前の手紙が変容し、単元を通して身に付けたことが生活に生きている状況を見ることができた。また、中学生の授業の振り返りからは「授業で書かなければならないから書く」のではなく、「自分らしい、本当の思いを書くことができた」「相手の気持ちを考えて書けた」というような満足感や達成感が見られた。

3つの視点以外では、書くことに係る資質・能力を育成する際に「その内容をより適切に表すことができる表現を判断する力」を育てる必要性を感じた。検証授業で「～が工夫されていてよい」と子どもが気付いた際、「どうしてその工夫がよいのか」と問い返し、「その工夫で文章にどのような効果が生まれているのか」「その効果は書き手の意図に対して適切なのか」を説明させて共有する活動を取り入れたものがある。これには、表現の意味や働き、対象と言葉との関係などを総合的に捉えて判断する意識を高め、学習の深まりを生む効果があった。

今後の課題に「交流」についての指導の工夫がある。少数ではあるが「交流」が好きではない、苦手だという意見があった。活動のねらいに即し、子どもたち自身が交流の意義を実感できる活動にすることが学び合いを生み、「書くこと」に係る資質・能力の確実な育成につながると考える。

今後も、思いを豊かに表現し、書く楽しさを実感できるよう更なる授業改善を図っていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| アンジェラ・アッカーマン 他 『性格類語辞典 ポジティブ編』 フィルムアート社 | 2016年 |
| 加藤康子 他 『超訳日本の古典 12』学研プラス | 2008年 |
| 黛まどか『季語のおう街』朝日新聞社 | 2000年 |